

同窓会

ニュース・レター 第18号

大阪大学
文学部
文学研究科
同窓会

2019年3月20日発行



大阪大学会館（旧イ号館）2018年11月23日、文学部70周年記念シンポジウム、同窓会総会会場

目次

新同窓会会長 あいさつ.....P2	研究室単位の同窓会（日本史学、ドイツ文学）.....P5
新研究科長 あいさつ.....P2	退職される先生方からのメッセージ.....P6～7
【特集】同窓会総会・創立70周年記念フォーラム・祝賀会	事務局便り.....P7
2018同窓会総会のご報告.....P2	山崎正和名誉教授
文学部創立70周年記念フォーラムのご報告.....P2～3	文化勲章受章記念フォーラムのお知らせ.....P8
同窓生からのメッセージ.....P4	第9回 同窓会講座のご報告.....P8
「教育ゆめ基金」のご報告.....P5	第10回 同窓会講座のご案内.....P8

〒560-8532 豊中市待兼山町1-5 大阪大学文学部・文学研究科同窓会

URL

<http://www.let.osaka-u.ac.jp/dousou/>

E-mail

dousoukai@let.osaka-u.ac.jp

同窓会会長を引き継いで

柏木 隆雄

二〇一五年四月から大阪大学文学部・文学研究科同窓会会長を務められた志水紀代子先輩が、少し体調を崩されて二〇一八年までの任期を待たず、退任の意向を告げられて、残り一年の任期を副会長の私が引き継ぐことになった。石原實初代会長から河上誓作、志水紀代子両先生の後、四代目となるが、文学部創立以来七十年を閲して、同窓会の会長が四人では、平均して二〇年弱と計算ではなるけれど、その実長は間初代会長にお願いしていた訳で、その意味でも卒寿を迎えられてなお矍鑠と現役で活躍されている石原氏に満腔の謝意を捧げたい。河上第二代会長は、同窓会の活性化に力を注がれ、多くの意欲的な改革を行われた。また他文学部の同窓会との連携にも心を砕き、法経の同窓会役員会に、文学部同窓会の三役（会長、副会長、事務局長）が参加し、以来旧大阪外大の外国語学部の同窓会「咲耶会」そして人間科学部の同窓会準備事務局が参加して毎年一回懇談会を催し、連携の絆を深めるよう配慮された。志水第三代会長は、持ち前の優しい気配りで、実務に奮闘する事務局長を励まして公務の遂行に尽力され、河上前会長同様、同窓会主催の行事に積極的に参加して下さった。さて第四代目は、会長に擬された役員会で固辞数度、何度も逃げ回る醜態を晒した挙げ句の就任で、まことに面目ない次第だがよく考えると同窓会の役員会には、一九八三年に文学部に赴任以来、ずっと幹事を仰せつかった、おそらく幹事会、役員会の出席はどの会員よりも多いはずだ。しかし量は質を上回らない。前会長の残務期間を埋める、ということでお引き受けはしたが、その間文学部創立七〇周年の記念行事が、文学部・大学院研究科と共催で行われ、「文学のチカラ、再発見」というテーマでの記念フォーラムに参加させて頂く機会を得た。西尾章治郎総長はか大学執行部の方々も臨席される中、小説家築山桂氏（日本史）、NHKの榎原美樹氏（西洋史）が登壇、お二人の颯爽とした講演は、いかにも女性の時代を象徴するようで、毅然とした信条、佇まいに大いに感銘を受けた。「榎原さんのお話を聞きたくて」と福岡からやってきた芸術史出身、現在シンガーソングライターという同窓生が、そのあとの懇親会で「来て良かった！」と喜んでいたり、私の同期生が東京、名古屋からも大勢来てくれて旧交を温められたのも、会長職の役得と云ったものだろう。七〇周年を謳うには、同窓生の出席がやや少なかつたという意見もあるゆえに、これを発展の一里塚として、今後も実務に大わらわの事務局長はじめ役員、幹事、同窓生諸氏のご協力をいっそう仰ぎながら、任期を無事に務めたいと思っている。



略歴
1944年生まれ。文学研究科博士課程単位取得。神戸女学院大学文学部助教授、大阪大学文学部教授、放送大学大阪学習センター所長、大手前大学学長を歴任。現在大手前大学客員教授、大阪大学、大手前大学名誉教授。

文学部創立七十周年によせて

福永 伸哉

昭和二十三年九月十四日付の文部省令第十七号は、その第一條に「学校教育法第九十八條第二項の規定により、大阪大学及び名古屋大学に、次の学部を設置する」と定め、続けて「大阪大学法文学部」に置かれる十二分野十五講座を列挙しています。こうして今から七十年前、大阪大学文学部は、文学・法学・経済学からなる旧制法文学部として出発しました。「大阪大学五十年史 部局史」（一九八三年）によれば、この年の六月に国会で法文学部の設置が決定されると、今村荒男総長は直ちに教官の人選に着手、八月には教官内定者が入学志願者募集要項を定め、学部規定、授業科目の制定に続いて、入試、採点、入学者決定等を行い、十月二十日に入学式、同二十五日に授業開始という、いまでは想像もつかないスピード感があったようです。敗戦後の新日本再建には大阪大学が人文系を含めた総合大学として再出発することが重要だという、関係者の強い思いがそこにはありました。

旧制の法文学部は、翌年の学制改革によって新制の文学部と法経学部とに別れて再出発することになり、その後も一九七二年の人間科学部の独立、一九九四年の教養部廃止と関係教官の分属、一九九八―一九九九年にかけての大学院重点化、二〇〇七年の大阪外国語大学との統合など、組織上の大きな変更を経て今日に至っています。

中世ヨーロッパのユニベルシタスに起源を持つ大学などと比べれば子供のような若い存在ですが、それでも七十年という年月は短いものではありません。老舗の研究室では教員もすでに五、六世代目となり、初期のエピソードはすでに「神話」の域に達しつつあります。この間に送り出した卒業生・修了生の数も一万人を大きく超えています。

草創期のたぎる情熱や勢いだけで走る時期はすでに過ぎ去りました。七十年間に培ってきた大阪大学文学部の学問的基盤からどんな新しい研究教育の姿を生み出せるか。またあらたな挑戦のページが始まります。



略歴
1959年生まれ。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程中退。博士（文学）。大阪大学埋蔵文化財調査室助手、文学研究科助教授を経て、2005年から同教授。日本学術会議会員。専門は考古学で、弥生・古墳時代史の研究が中心。大阪府百舌鳥・古市古墳群の世界遺産登録の活動にもかわる。著書に「邪馬台国から大和政権へ」、「三角縁神獣鏡の研究」、「古墳時代の考古学」(全10巻、責任編集)など。

二〇一八年同窓会総会のご報告

二〇一八年一月三日（金） 於：大阪大学会館講堂

去る二〇一八年二月二三日、大阪大学文学部・文学研究科同窓会 総会が、大阪大学会館で行われました。柏木隆雄会長の挨拶の後、二〇一四年度から一八年度までの事業報告、二〇一七年度の会計報告、一部の会則の改定（役員の人数的変更等）が認められました。

続いて、大阪大学文学部創立七〇周年記念フォーラム「文学のチカラ、再発見。」および祝賀会が行われました。大変好評だった当日のフォーラムについて、司会を担当された金水敏先生にご寄稿願いました。



特集 文学部のチカラを再確認

大阪大学文学部創立七〇周年記念フォーラム報告

金水 敏（大阪大学大学院文学研究科・教授）

二〇一八年二月三日（土・祝）一三時より、大阪大学会館講堂で大阪大学文学部創立七〇周年記念フォーラム「文学部のチカラ、再発見。」が行われた。プログラムは下記の通り。

● オープニング・トーク

「一文を学び、武をば練る― は死語か?」

柏木隆雄（大阪大学名誉教授・フランス文学）

● 卒業生講演

「大阪の学問所」

築山桂（小説家）

「歴史とジャーナリズム」

榎原美樹（NHKエグゼクティブ・プロデューサー）

● 座談会

「文学部のチカラ、とは?」

柏木隆雄・築山桂・榎原美樹

司会・金水敏（大阪大学教授・国語学）

オープニング・トークで柏木氏は、まず大阪大学の前身校の一つである大阪高等学校の全寮歌の歌詞から「文を学び武をば練る 五百の健児君見ずや」という歌詞(沼間昌教作詞)を紹介された。ここでの「文」を基礎学問としての人文学、「武」を実学全般になぞらえて、日本の洋学の歴史を振り返り、適塾で学んだ福沢諭吉が『学問ノススメ』において、基礎学問の学習よりも実学的な応用に重点を置いたことを問題として指摘された。

築山桂氏は、本学大学院の日本史専門分野で博士後期課程まで学ばれた当時のことを振り返られ、史料や論文と格闘された時期を「幸せな時間」と捉えられ、その経験が「学問をする人」を主人公として扱う時代小説を書くことに自分を振り向かせたと回顧された。

榎原美樹氏は学生時代、教養部の堀井敏夫先生(文学部名誉教授・故人)の「歴史に唯一の正解というものはない。自分自身の解釈がむしろ重要だ」というお言葉に背中を押されて西洋史に進まれたこと、NHKに就職が決まったとき、NHKの特派員をされていた山室英男氏(故人)のご講演を聞いて、「ジャーナリストとは歴史が動くその現場に居合わせる職業で、歴史を見つめる仕事である」と教えられて、仕事に就く勇気をもらわれたと触れられた。

座談会では、まずお三方に「文学部のチカラとは何か」と司会者が問いかけたところ、榎原氏は「日本人に不足しがちな、海外への発進力を育成することが大事」と答えられた。

築山氏は、「何でも数値に置き換えて重要度が測られる世の中で、数値では表せない価値を教えるところが文学部」と述べられた。柏木氏は、「文学部の教育は、一人で学び一人で考える力を付けるところに本質があり、それこそ今の世の中に必要とされる力」と述べられた。次に、榎原氏と築山氏に「今のお仕事の中で、女性であることで分かることは何か」と問いかけたところ、榎原氏は「世の中には、女性だからこそ見えること、重要さが分かることはたくさんあるのに、男性中心のジャーナリズムの世界では、そのことが軽視されてきた。世界の半分は女性なのだから、これからは女性の目線をもっと重視した報道になっていくべき」と述べられた。築山氏は、「女流作家であることをもっと利用してセールスす

べきではと言われたことがあったが、そういったイメージは時間の流れとともに変わっていく。女性に対するステレオタイプを解き放った視線で作品を書きたい」と述べられた。最後に柏木氏が、「文学部の学問は、言葉の力の上に成り立っている。ことに日本人にとって日本語の力こそ大事。今、言葉の力が脆弱になっている中で、文学部が言葉の持つ力をより発揮させることに力を注がなければならない」と結ばれた。三者三様の視点からのお話であったが、歴史を見る目や言葉の力を育むことの大事さ、ジェンダー的視点の重要性が改めて確認でき、まさしく文学部のチカラを再発見した思いであった。



プロフィール



金水 敏 (きんすい・とし)
大阪大学大学院文学研究科教授(国語学)。1997年大阪大学文学部助教授に着任。2001年より現職。2016～2017年度に大阪大学大学院文学研究科長・文学部長を務める。主な著書に『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』(岩波書店、2003)、『日本語存在表現の歴史』(ひつじ書房、2006)。



アセンブリーホールにて祝賀会の様子

マハバル・サウガゲレルさんによる
モンゴル民族音楽の演奏
(音楽学博士前期課程)



同窓生からのメッセージ

編集センターというところ

安河内 敬志

整理部（いまは編集センターと言います）に異動が決まった時には、こんなことをするために新聞記者になっただんじやないと落ち込みました。

阪神大震災とオウムの地下鉄サリン事件が起きた年に入社し、宇都宮へ。初めて褒められたのは、半年過ぎた頃の、支局前に積もった雪かき。「腰が据わっている」と。学生時代の発掘経験が活きました。

特ダネは書けなかったけど、記者生活は楽しかった。でも四年後に「整理部へ」。

これまでの知識も、経験も何一つ役に立ちません。内勤になり、自分が任された面で、何をトップにして、どういう見出しをつけて、どのくらいの大きさで扱い、どの原稿をボツにするかといったことを判断し、レイアウト用紙に下書きして、パソコンで組み上げる。

作業の最中に新しいニュースが入ってきて、大きく組み替えるものも。東日本大震災の時は締め切り直後に「原発の炉心溶融」が入り、輪転機を止めて入れました。



会社に来たくまモンと。肩を揉んでくれました。

安河内敬志（やすこうち たかし）
1991年4月 文学部入学
95年3月 同史学科卒業（考古学専攻）
95年4月 朝日新聞入社。宇都宮支局へ配属。警察・高校野球・宇都宮市政など担当
97年4月 奈良支局へ。警察・文化財・県政・教育など
99年5月 福原通信局へ。管内の発生もの（事件事故）や行政・文化財などを1人でこなす
2001年9月 大阪本社整理部へ。地域面やニュース面作成など
07年5月 西部編集センター（福岡）へ。北京五輪の紙面作成など
13年11月 大阪編集センターへ。16年参院選の紙面責任者など

慣れぬ仕事と不規則勤務でたまったストレスを暴飲暴食で解消したため、一年で一〇キロ太りました。しかし、様々なニュースに立ち会うのが面白い。深夜に入ってきた事件を、いかにさばいて締め切りに間に合わせるか。そんなところに達成感を味わっています。

今は「デスク」です。机にへばりついて仕事をしている人、という意味。朝刊は午後一時半前後に着席し、仕事が終わるのは午前二時ごろ。紙面の質を担保するのが役目です。どの記事をどの面で扱うかを、日々判断しています。例外的なのですが、一昨年は甲子園球場で、高校野球の警備を担当しました。

紙面での扱いを誤ると、読者からお叱りを受けます。つい先日、原発再稼働の記事が少ないと指摘され、スポーツ面の見出しで「だじゃれが多すぎる」と言われました。褒められることは、ほとんどないのですが。

文学を読む喜びを知る授業を

坂井 二三絵

私は、二〇〇二年に大阪大学文学部を卒業し、大阪大学大学院に進学して日本近代文学を専攻し、二〇一〇年に博士後期課程を修了しました。大学院在籍中から私立大学工業高等専門学校で働いています。

工業高等専門学校、略して高専は、五年制の高等教育機関で、一五歳から二〇歳までの学生が、エンジニアのリーダーとなるべく学んでいます。学生は、普通高校と同じ一般教育の授業も受けながら、一年生から工学の専門授

業も受講します。また、実験や実習の授業も多く、実践的な技術と能動性・協調性を身に着けることを目標としています。

現在私は、国語と日本文学を教えています。理系の学校で国語の授業、やりにくそうと思われるかもしれませんが、これが結構面白いのです。学生は自分で考え作業するのが好きで、授業方法や課題の出し方を工夫すれば、よく応えてくれます。また、マンガやアニメ・ゲームに加えてインターネットにもどっぷりの学生たちは、「物語を読む」ことに慣れていきます。サブカルを楽しんだら、ネット上で感想を交換し、分析サイトを覗くのが彼らの日常です。授業でもうまく展開できれば、『富嶽百景』や『山月記』が「難しい」「勉強のための」作品ではなく、「ツンデレ」「インスタ映え」「中二病」など彼らの使い慣れた言葉もツールとして、実感を持って議論できる作品になります。「教科書で昔の作品を習う」のではなく、彼ら自身が自由に文学を楽しむ授業にしたいと考えています。

大学では、日本文学だけでなく美術史の授業をたくさん受講しました。現在でも美術展に行くのは、煩雑な日常から離れて静かに自分を解放してやれる貴重な時間です。私の学生たちも、将来仕事で使うことはないとしても、生活の中で少し心を豊かにする、少し気持ちを癒してくる、身近で心強い味方として文学を知ってもらえたらと思うのです。



坂井二三絵（さかい ふみえ）
1998年 大阪大学文学部人文学科入学
2002年 同 卒業（日本文学国語学専攻）
大阪大学大学院文学研究科へ進学
2011年 学位博士（文学）取得
研究テーマ「明治文学における『装い』」
2012年より大阪府立大学工業高等専門学校に勤務

◆「教育ゆめ基金」のご報告◆

いつでも、お心のままにご寄付いただければ幸いです

文学部創立60周年(平成20年)の折に創設しました「教育ゆめ基金」は、文学部・文学研究科の教育活動を支援していただくための基金です。この基金は、人文学教育の国際化、学生の海外留学支援、留学生の支援、優秀な学生への奨学金等、もっぱら優秀な人材を育成するための教育助成を目的としています。2013年秋に大阪大学「未来基金」と窓口統合したことにより、いっそう多くの同窓生ならびに教職員の皆様より、2018年度総計165万円ほどのご寄付をいただきました。ご厚情に心よりお礼申し上げますとともに、今後ともご支援を賜りますようお願い申し上げます。(文学研究科長 福永 伸哉)

2018年1月～2018年12月「教育ゆめ基金」寄付者リスト(敬称略・五十音順)

浅田 博之	大河原健太郎	上山 泰	北村 登	小松 洋一	梁川 清美	場知賀礼文	堀川 幹夫	森山 貴仁	
天野 一平	大坪 利絹	川井 紀子	木村 和美	小山 高正	高見 寛信	濱吉 繁子	松田 孝一	安田 篤生	
栗根 功雄	大野篤一郎	河上 誓作	熊谷 憲八	斎藤芙美子	千葉孝一郎	平岩 静	松田 順子	山口 敬嗣	
石橋 順子	大村 睦子	川添 一郎	黒川 行信	佐々木 実	土池 敏子	平田 雅子	南 秀明	山田 一子	
石原 実	奥村 忠男	岸 彰則	黒羽 茂子	澤田和加子	中川 慶子	深水香津子	宮川 文子	山田二三夫	このほか、
岩佐 敦彦	加地 宏江	北川 清仁	桑田 光子	沈 国威	中原 計	福田 治子	三宅 葵	李 云平	氏名掲載を
浦崎なぎさ	片倉 穰	北泊謙太郎	小谷晋一郎	千貫 菊子	中村 桂子	藤田 隆則	宮本 孝二	渡辺 晶夫	希望されな
榎原 美樹	金子 展大	北原 靖明	小林 正人	蘇 啓誠	西尾 元伸	古川 敏之	村江 美紀		い方16名

◆「教育ゆめ基金」の支出(見込)(2018年4月～2019年3月)

- 文学部海外留学支援制度奨学金 720,000円(4名分)
- 文学研究科大学院生海外調査等助成 480,000円(5名分)
- エラスムス・ムンドゥス留学生奨学金 288,000円(2名分)
- 計 1,488,000円
- ※2018年度末残額(見込):11,031,000円

文学部・文学研究科では、多くの研究室がそれぞれ独自の同窓会活動を行っています。今回は、こうした活動のうち、日本史とドイツ文学のものを紹介いたします。

師資相承

三谷 研爾

ドイツ文学研究室では、毎年同窓会を開いていた時代がありました。その後、卒業生・修了生を中心に組織する大阪大学ドイツ学会の活動が軌道に乗ってからは、その総会・研究発表会が同窓会の側面も併せもつようになり、現在にいたっています。

大阪大学ドイツ学会は、もともと片山良展先生の還暦をお祝いする事業として1985年にスタートした「独文学報」刊行会が発展したかたちです。片山先生が命名され、また表紙題字に筆を振るわれた雑誌『独文学報』は、研究成果発表の機会を得るのに苦労しがちな若手にチャンスを与えるために創刊された、当時の先輩方の尽力の賜物で、今年(2018)で34号を数えることになりました。論文執筆は引用個所のドイツ語原文も提出して編集委員会の査読を受けるという、類例のすくない厳格な方式は、片山先生から中村元保、林正則両先生へと受け継がれてきた阪大独文の学問伝統をふまえています。

研究発表会ではかならずベテラン会員に(研究発表ではなく)講演をしていただいております。これまでも中村先生、林先生のみならず、深見茂、平田達治、鎌田道生、渡邊洋子、春山清純といった諸先輩に、長年のお仕事にもとづいた含蓄豊かなお話を伺ってきました。懇親会では参加者全員がそれぞれ近況報告をするなど、親睦にも努めています。毎年11月後半から12月初旬にかけての研究室恒例行事になっていて、卒業生・修了生の皆さまにはどなたでもご参加いただけます。ぜひいちど様子を見にお越しください。

現在の研究室は三谷研爾教授、吉田耕太郎准教授、クラウス・テルゲ特任講師の3名で、18世紀から現代までのドイツ語圏の文学・文化をひとわりカバーする指導態勢です。ドイツ語圏を越えて中欧全体を視野に取めた研究・教育に取り組むよう心がけ、また文学と音楽・美術などとのつながり、さらに日本におけるドイツ文化についても、若いひとたちと一緒に考えていきたいと思っています。

卒業・修了生と現役世代をつなぐ

一発足当初の待兼山史友会と現在一 北泊 謙太郎

日本史研究室の同窓会的組織である待兼山史友会は、1986年4月13日にその産声をあげました。「同窓会」発足のきっかけとなったのは、1986年2月に開催された黒田俊雄先生の還暦記念パーティーであったと伝え聞いています。1948年秋に開設された国史研究室(現、日本史研究室)では、年に3～4回程度の『研究室通信』の刊行と、1～2年毎の『研究室名簿』(同窓会名簿を兼ねる)の作成とを通じて、卒業・修了生と研究室とをつなぐ役割を果たしてきました。しかしながら、大学紛争などを背景として『研究室通信』の刊行も途絶えてしまいました。そのため、年1回程度の会合を開いて、卒業・修了生との交流や同窓生相互の交歓を深めることを目的とした待兼山史友会が結成されたのです。

もとより「同窓会」の名称が最初から待兼山史友会と決まっていた訳ではなかったようです。「同窓会」の準備段階では「国史談話会」「日本史懇談会」「待兼山史談会」などの名称が挙げられていました。これらの名称からは、この「同窓会」組織が談話を聞くこと、換言すれば、形式張らない発表を聞いて意見交換をすること、を待兼山史友会の事業の柱として当初から構想していたことがうかがえます。現在の待兼山史友会の活動としては、①総会の開催(年1回)、②会員名簿の作成(3年に1回)と会報の刊行(年1回)、③新入生歓迎旅行・研究室旅行・予饗会の案内などがあげられますが、これらの活動内容は1986年の発足当初から基本的には変わっていません。今後も、卒業・修了生と現役世代をつなぐ同窓会的組織として、この待兼山史友会が皆さんのお役に立つよう活動していきたいと思っています。



退職される先生方からのメッセージ

(五十音順)

◆学生として卒業、そして教師として卒業

入江 幸男

私は十八歳のときに四国から出てきて、阪大文学部に入学しました。そのまま大学院に進学し助手になり、ある私学に勤務し、その後助教として文学部に戻り、その後教授になり、いよいよ今年六十五歳で定年を迎えることになりました。入学してから四十七年が経ちました。その間多くの先生方や先輩に教えを受け、友人たちと切磋琢磨してきました。教師となつてからは同僚や多くの優秀な学生たちから刺激を受け、研究を続けてきました。皆さんに感謝しています。良い学生であることは、(いろいろな意味で)よく勉強する学生だと思つたので、自分が好きなことを一生懸命やればよいのだとすると、学生によく勉強させることだと思つた。といっても大学での勉強は、強制してやらせることができるようなものではないので、教師に出来ることは勉強するように促すことだけです。昔ある先生に、教師の力量は、学生の出来に「ぶさ」に反映すると、伺ったことがあります。そうだとすれば、よい教師であるためには、優れた研究者や人間であることが一番重要なのだと思つています。そのように考へて、研究者として私なりに頑張つて過してきましたが、結果については皆様の判断にゆだねるしかありません。

私が阪大に入学した昭和四十七年は、学部から人間科学部が分かれた最初の年で、人間科学部一期生と同じ学年です。一学年の定員は、八〇名で、それに応じて大学院生の数も現在よりも少なかったです。そのため、学生同士の交流も、教師と学生の交流も、今よりもはるかに密であつたようにおもいます。今は、院生は業績づくりに追われ、教員は運営業務と多様な種類の授業と科研の仕事に追われ、留学生の世話と海外での研究発表に追われて忙しくなり、学生と教師の関係がかなり変わつてきたとおもいます。変化を迎える大学の中で、私があツプアツプしながらようやく二度目の卒業を迎えられるのは、同僚、学生、事務方の皆様のおかげです。ありがたうございました。大学を辞めないというのは、皮肉な状況ですが、二度目の卒業を迎えて、これから自由に研究できることを楽しみにしています。



略歴
1953年、香川県生まれ。大阪大学文学部(哲学)後期課程単位取得退学。大阪大学文学部助手、大阪樟蔭女子大学講師、助教授を経て、著書『ドイツ観念論の實踐哲学研究』、学ぶ人のために、『コミュニケーション理論の射程』、『フィヒテ知識学の内容』

◆レゾンデートル

榎本 文雄

「レゾンデートル」、大阪大学文学研究科をこの三月に定年退職するにあたり、本研究科刊行の『待兼山論叢』の「研究の視点」をこの言葉で結びました。「存在理由」や「存在意義」を意味するこのフランス語は、私の学生時代の恩師の一人がよく口にされていた言葉です。その先生はサンクリット語・文学の世界的権威の一人で、若い頃パリで研究され、ソルボンヌ大学の教授とのフランス語による共著もあります。先生が「レゾンデートル」とおっしゃる時は、母校の大学やインド学講座の存在理由・意義を指しておられたように記憶しますが、私が「研究の視点」で意図したのはインド学・仏教の研究としての存在理由・意義でした。

この「レゾンデートル」という言葉を知る以前、高校から大学の教養部の頃、私は何のために生きているのかという思いにかられ、自分自身の「存在意義」を問い、人にも尋ね、それでも納得のいく答えを得られぬまま空しく時を過ごしていました。しかし、ごく最近になって、私の研究対象であるインド仏教の「縁起」の思想の中に、この問いに関するヒントが潜んでいることに気がしました。「縁起」は元来、仏教用語ですが、現代日本語の「縁起」と異なり、「因果の理」が本来の意味で、そこでは、月とスッポンの間にも、互いに他者の存在を妨害しないというあり方での因果関係を認めます。すると、宇宙の万物は、全て互いに因果関係にあり、必ず何らかの影響を他に与えるものであり、言い換えれば、無意味なものなど何一つ宇宙に存在しないこととなります。

私は哲学講座の教員でしたが、研究対象のインド学・仏教は西洋哲学とは研究方法が大幅に異なり、自分が哲学講座の教授であることに對して何かおこがましいような感覚を常に懐いてきました。しかし、「レゾンデートル」という言葉が哲学用語であることを最近知り、最後の「研究の視点」をこの言葉で結ぶことができて、ようやく少しばかりその感覚から解放されたような気がします。



略歴
1954年、和歌山県生まれ。京都大学大学院文学研究科博士後期課程指導認定退学。京都大学文学部助手、華頂短期大学助教授を経て、1996年4月大阪大学文学部に着任。著書に、『不殺生(アヒンサー)の動機・理由——インド仏教文献を主資料として——』(龍谷大学現代インド研究センター)、『ブダゴコーサの著作に至るパリ文献の五位七十五法対応語集——仏教用語の現代基準訳語集および定義的例集——』(編著代表、山喜房佛書林)、『スッタニパータ【釈尊のことは】全現代語訳(共著、講談社学術文庫)など。

◆学生から感謝される二つのことから

加藤 洋介

学生にとつて大学を含めた学校という場は、一つの通過点であるに過ぎないのが普通であり、それが健全な姿でもあろう。よほどのことがない限り、教員が学生から感謝されるということはない。世に「謝恩会」なる場があり(私の所属していた日本文学・国語学研究室では「惜別会」・卒修了式後に感謝の意を伝えられることはあるが、これは一種の儀礼的なものであろう(儀礼的であることが悪いということではない))。

大阪大学に勤務するようになってしばらく経て、学生が直接私の研究室まで来て、感謝の意を伝える機会が二つほどあることに気がついた。一つは博士後期課程の大学院生に限られるが、日本学術振興会の特別研究員に採用された時である。これは学生が研究に専念できるよう経済的支援をし、研究費を支給してくれる制度であるが、二・三年間の研究計画をまとめた申請書を提出し、審査を受けて採択されねばならない。研究者でこれに相当するのが科学研究費補助金(通称、科研費)であるが、私はほぼ途切れなくこの科研費の交付を受けてきた。要はアイデアさえ浮かべば、この手の申請書書きが得意なのである。そこである時期から、自分の指導学生はもちろんのこと、そうでない学生にも直接「早く書け」「早く持つて来い」と声をかけ、持つてきた学生には何度でも助言や添削をし、一緒に研究課題名を考えたりした。全員というわけにはいかなかったが、かなりの学生が採択されるに至ったことは、自分の「福」を分けることができたようで嬉しかった。

もう一つは、それほど数は多くないものの、私が就職に関する仲介をしたり相談に乗り、結果として採用が決まった際である。文学部のとくに女子の学生は、固い選択を好む傾向があり、教員や公務員の志望者が多い。評判になつていく書籍やネットでの情報を仕入れておき、機会があればそれを学生に積極的に伝えることにしている。ある時には、薦めた本が面接試験の場で取り上げられたことがあり、その学生は無事とある県庁に採用された。中高一貫校の現場の先生から、教員志望の学生がいれば採用試験を受けよう薦めてほしいと依頼されることもある。お薦めできる優秀な学生が周りにいることが多いので、うまく仲介できたことが何度かあった。私に何らかの関わりがあった学生が、よいキャリアを築いていくことは、私に何らかの関わりがあった学生が、よいキャリアを築いていくことは、教員として無上の喜びとするところである。



略歴
1962年名古屋生まれ。名古屋大学大学院文学研究科博士後期課程中退。国文学研究資料館、愛知県立大学文学部を経て、2006年4月大阪大学文学研究科に着任。編著書に『河内本源氏物語校異集成』(風間書房)、『伊勢物語校異集成』(和泉書院)。

◆恵まれた場所・多彩な人たち

清水 康次

二〇〇九年に、文学研究科の文化動態論専攻文学環境論コースに着任しました。大阪外国語大学との合併によって生まれた専攻のポストで、文化形態論専攻の比較文学専門分野を兼担し、外国語学部日本語専攻の教授でもあるという、それぞれに個性的な三つの所属を何とか勤め上げてきた日々でした。

私は、日本近代文学を研究していました。そして、文学作品そのものの研究とともに、作品の入れ物にも興味を持ち、近代の本や雑誌のありようを研究していたことが、自分で「書誌出版文化学」などと名づけて、私なりの文学環境論に発展していきました。

大阪大学の文学部・文学研究科でまず驚いたのは、同じ対象に向かって複数の講座からのアプローチができることでした。例えば、日本近代文学を研究したい学生の場合、日本文学・比較文学・文学環境論のどこから入ってもよく、入り口を選べるということだけでも、他の大学にない特色で、それはまた、どこから入るにしても、別に入り口からの授業も受けられ、別の講座の学生とも専門的な話ができるという、希有な利点となっていました。

次に驚いたのは、留学生の多さで、私のところへも研究生として指導してほしいという、海外からのメールがひっきりなしに届きました。その結果、私の指導する院生を集めたゼミは、ほとんどが留学生という年もあり、文化も母語も異なる院生たちが、日本近代文学の研究を共有し、それぞれの研究を発表し議論しあう、貴重な場にいることができました。そのことの喜びや幸運は、仕事に追われる中では十分自覚できていたとはいえませんが、おそろく、輝かしい日々として忘れることのできないものとなるでしょう。時に、文学環境論コースの院生室が、夜も灯火の消えない、研究と交友との詰まった、暖かくやわらかな空間になつていくことも忘れがたい思い出です。

いくつものアプローチの方法を体験できる上に、習得してきたものも発想も思考方法も異なる学生が集うというのは、この大学の文学部・文学研究科ならではのことに思います。私の力では、まだまだ活用できない部分も多かったのですが、学生院生諸君が、この他に類のない長所を生かして、それを十分に利用して、これからの研究を進めて行ってくれることを願います。そして、何よりも、自分がそのような環境の中で過ごせたことを、みなさん的心から感謝いたします。



略歴
1954年奈良生まれ。京都大学文学部助教授を経て、大阪外国語大学に転任。大阪外国語大学で「日本文学」の専攻主任を務める。著書に、『芥川文学の法門』『世界と芥川文学』(大阪大学出版会)、『漱石全集』第27巻「単行本書誌」(岩波書店)など。

◆大坂の文化を世界に

山本 嘉孝

二〇一六年四月に着任してから三年間、大阪大学の卒業生・教職員・学生の皆様には大変お世話になり、ありがとうございました。心より厚く御礼申し上げます。

日本漢文学という、少し風変わりな分野を専攻する私にとつて、江戸時代の日本で漢詩文が読み書きされた多様な局面やその記録を思い存分取り上げた。日本の学問・政治・文化の中核を漢学・漢文学が長らく担ってきたこと、よく理解し、関心を示して下さった国内外からの院生・学部生・研究生の存在はいつも大いに励まされました。そして、日本文学・中国哲学・比較文学・日本文学・日本語学・美術史の先生方、また仏文学・独文学・英語学・音楽学などの先生方に至るまで、未熟な私を温かく導いて下さいました。感謝の念に堪えません。

大阪大学ご出身の日本文学研究者の皆様にも常々お世話になっております。そのお一人のご紹介により、天満橋近くで煎茶と挿花の稽古を始めました。大坂・大坂の優美な文化を肌で感じる貴重な機会となりました。本年より、ロンドンの日本研究者を中心として、近世大坂文人たちの合作に焦点を当てた共同研究も始動する予定です。どこまでも洗練され、常に上質なものを希求しながら、肩をいかにせぬ浪華の文化は、余裕・遊び(部分)を作っておくことが、個々の生活においても、社会全体にとつても、いかに大切であるかを忘れがちな世の人々に有益な指針を与えるものだと思います。海内・海外を問わず、世界に広く紹介されるのが当然でしょう。これまでの私個人の研究は単なる力不足の故に江戸・加賀に偏つておりましたが、これからは大坂・京都・紀州の研究にこそ意を注いで参りたい所存です。

本年四月からは、東京都立川市にある国文学研究資料館の研究科で勤務することとなりました。大阪大学の皆様から頂きました御恩と御厚情に、まだまだ十分にはお応えできていない時点で御出となり、甚だ心苦しい次第ですが、同資料館は大学共同利用機関であり、国内外の大学や研究者と広く連携しながら日本文学研究を推進することを使命として遺ります(ここで「文学」とは広義のそれであり、書物に記し遺されたあらゆる事柄を含みます)。今後とも大阪大学の皆様にはお世話になります。末永く、御教導の程、何卒宜しくお願ひ申し上げます。



略歴
1985年生まれ。米国ハーバード大学(修士課程)。東京(比士)大学大学院総合文化研究科(博士課程)単位取得満期退学。論文に『山田仁左衛門の射程』(近世文学研究 99号(2014))、『室鳩巣と儒学』(『室鳩巣の受容』(2018))、『室鳩巣の受容』(『室鳩巣の受容』(2018))など。

事務局便り

●お知らせ

◇文学部・文学研究科 卒業生・修了生名簿(二〇一七年版)について
二〇一七年三月刊行の『大阪大学文学部・文学研究科卒業生・修了生名簿』ご購入を随時承っております。頒価(五千四百円・送料込)でお送りいたします。ただし名簿のご購入は同窓会会員の方に限定しておりますので、ご入会がお済みでない同窓生の方には入会手続きをお願いしております。あらかじめご了承下さい。なお、新規に同窓会終身会費(一万円)をお支払いただいた方のうち、希望される方に一冊呈呈しております。振込用紙通信欄に名簿希望の旨をお書き添え下さい。
◇ご購入希望の場合は以下の郵便振替口座に所定の金額をお振込み下さい。ご購入確認後、発送させていただきます。ご購入に際しご質問等ございましたら同窓会事務局まで遠慮なくお問い合わせ下さい。

◇同窓会への寄付について

同窓会では、寄付金(一口二千円)を受け付けております。昨年度、今年度と、たくさんの方に支援を賜りました。八頁に寄付をいただいた皆様の御芳名を記載しております。誠にありがとうございました。引き続きご支援をお願い申し上げます。

【名簿購入代金・終身会費のお支払い、ご寄付の受付】

□座番号 009401179043
加入者名 大阪大学文学部同窓会事務局
*お手数ですが、通信欄に①卒業修了年、②専攻専修名をご記入下さい。

●お願い

◇住所変更について
住所変更・勤務先変更等ございましたら、必ず同窓会事務局までご一報下さい。名簿への住所・電話番号等の記載拒否を希望される場合は、その旨あわせてお知らせ下さい。皆様のご協力をよろしくお願い申し上げます。

●大阪大学文学部・文学研究科同窓会

- ◆会長：柏木隆雄(S四四卒)
- ◆副会長：大西愛(S四〇卒)、玉井暉(S四四卒)
- ◆事務局メンバー
事務局長：舟場保之(S六一卒)
事務局長：高木千恵(H一〇卒)
企画：田口宏二郎(H六卒)、田中英里(H一〇卒)
広報：斎藤理生(H一〇卒)、中尾薫(H一五修)
- 会計：事務局補佐：米田恵

●住所：〒560-0803 豊中市待兼山町一番五号

●ホームページアドレス：http://www.letosaka-u.ac.jp/dousou/

●事務局メールアドレス：dousoukai@letosaka-u.ac.jp

山崎正和名誉教授文化勲章受章記念フォーラム

文学研究科（演劇学）の名誉教授で、戯作家、評論家としてもご活躍されている山崎正和先生が、2018年11月3日、文化勲章を受章されました。文学研究科では、それを記念して、下記の通り、記念フォーラムを開催いたします。ご参加をお待ちしております。

日時：2019年6月8日（土）
14:00～17:00

場所：大阪大学会館 講堂

定員：200名（要事前申し込み）

主催：文学研究科

共催：文学部・文学研究科同窓会

登壇者と講演題目：

山崎正和「社交と思考」

鷺田清一「双葉の思考」

天野文雄「能楽研究からみた山崎戯曲
『世阿弥』のことなど」

フォーラム終了後、大阪大学会館アセンブリーホールにて祝賀会も開催します（事前申し込み制、会費5000円）。同封の申し込み専用ハガキにてお申込みください。

※同封のハガキで申し込まれた場合、必ずご参加いただけます。参加証等の発行はありません。当日受付でお名前と卒業年・講座・専門分野をお告げください。

問い合わせメールアドレス：yamazaki.forum@gmail.com

第9回 大阪大学文学部・文学研究科 同窓会講座報告

2018年5月12日に第9回同窓会講座『文学と音楽の午後』が行われました。第一部は、文学研究科教授・和田章男先生（仏文）に「文学と音楽があうときーフランス人作家によるベートーヴェン受容ー」というテーマでご講演いただきました。古い・病をキーワードとしてブルーストがベートーヴェンの後期の弦楽四重奏(特に15番)を好んだ理由の謎解きが鮮やかに示されました。第二部では、茶菓が振舞われる中、阪大交響楽団卒団員によってこの第15番が演奏されました。終始和やかな雰囲気の会となりました。



第10回大阪大学文学部・文学研究科 同窓会講座のご案内

2019年5月12日(日) 15時00分～17時00分
「阪大東洋学の最前線」

- 仏教学や植民地学の系譜を承け、わが国における「東洋学」は世界レベルの蓄積と水準を誇る分野のひとつです。今回は、トルコ学、およびインド＝イラン学研究の最前線で活躍する本学教員より、歴史学・哲学・文献学をめぐる議論の一端を紹介いたします。
(講演後はトルコ料理かインド料理を楽しむ会合を設ける所存です)

※会場：大阪大学文学部 本館2F 大会議室

※講師：松井太先生(本学教授)

「モンゴル時代シルクロードの仏教巡礼」

堂山英次郎先生(本学教授)

「閻魔王の原像を求めてーインド・イランの視点からー」

※参加費：無料

●お申し込み方法

氏名・卒業(修了)年次・専攻を明記の上、メール又はハガキで下記連絡先までお申し込みください。

※応募締切は、2019年4月30日(火)です。

※応募多数の場合は先着順とさせていただきます(定員70名)。

メール：dousoukai@let.osaka-u.ac.jp

住所：〒560-8532 大阪府豊中市待兼山町1-5
大阪大学文学部・文学研究科同窓会 宛